

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第39集

三ヶ尻遺跡Ⅳ  
三ヶ尻古墳群Ⅱ  
(三ヶ尻古墳群第5号墳)

2021

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第39集

み か じ り い せ き  
三ヶ尻遺跡Ⅳ  
み か じ り こ ふ ん ぐ ん  
三ヶ尻古墳群Ⅱ  
み か じ り こ ふ ん ぐ ん だ い      ご う ふ ん  
(三ヶ尻古墳群第5号墳)

2021

埼玉県熊谷市教育委員会

## 序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富んでいる上、我が国及び関東を代表する2大河川である利根川・荒川が市内を流れ、大河がもたらす肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。このような自然環境のもと、市内には、先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

さて、市内には地下に埋蔵されている多くの遺跡が所在します。そして、これらの遺跡内では各種開発が行われ、遺跡を保護保存できない場合が多数あります。その場合には、発掘調査という記録保存を行い、後世に伝えるべく方策を採っています。

本書は、令和元年度に実施された集合住宅建設に伴う発掘調査の成果をまとめたものです。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護に御理解、御協力を賜りました関係者の皆様には厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

熊谷市教育委員会  
教育長 野原 晃

## 例 言

- 1 本書は、市内遺跡「三ヶ尻遺跡・三ヶ尻古墳群・三ヶ尻古墳群第5号墳」の発掘調査報告書である。  
三ヶ尻遺跡 埼玉県熊谷市三ヶ尻字林3408番 他 (埼玉県遺跡番号59-019)  
三ヶ尻古墳群 同上 (埼玉県遺跡番号59-021)  
三ヶ尻古墳群第5号墳 同上 (埼玉県遺跡番号59-021-005)
- 2 本調査は、集合住宅建設工事に伴う事前の記録保存目的の発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、発掘調査の概要のとおりである。
- 4 発掘調査は、令和元年5月15日～6月30日の期間で実施した。  
整理・報告書作成期間は令和2年5月1日～令和3年3月19日である。
- 5 発掘調査、整理・報告書作成事業ともに、腰塚 博隆が担当した。
- 6 本書の執筆は、腰塚が担当した。
- 7 写真撮影は、発掘調査、遺物ともに腰塚が行った。
- 8 基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。
- 9 出土遺物は、熊谷市教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

(敬称略)

埼玉県教育局文化資源課、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、山崎 武

## 凡 例

- 本文中、遺構の略記号は、次のとおりである。  
SS…古墳 SZ…周溝 P…ピット
- 土層断面図及び平面図中の表記記号は、次のとおりである。  
S…川原石 P…土器
- 遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のは個別に示した。  
平面図…1/60
- 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。
- 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。  
土師器・須恵器・埴輪・陶磁器・土製品・石器…1/4
- 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。  
石器の磨面範囲 ←————→ 敲打範囲 ◀————▶
- 遺物拓影は、原則として、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。
- 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。  
法量の単位は、cm、gである。また、推定値は括弧付けで示した。  
胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。  
A…白色粒子 B…黑色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子 F…白色針状物質  
G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石 L…片岩 M…砂粒 N…礫  
焼成は、次のように区分した。  
A…良好 B…普通 C…不良
- 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。
- 土層及び遺物の色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行）に照らし最も近似した色相を示した。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 発掘調査の概要	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過	1
(3) 発掘調査、整理・報告書作成の組織	1
II 遺跡の立地と環境	3
III 遺跡の概要	12
(1) 三ヶ尻遺跡、三ヶ尻古墳群について	12
(2) 調査の方法	12
(3) 検出された遺構と遺物	12
IV 遺構と遺物	13
1 墳丘	13
2 ビット	21
3 遺構外出土遺物	27
V 調査のまとめ	28

# 挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形図	3
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 調査地点位置図	9
第4図 三ヶ尻古墳群第5号墳 墳丘位置図	10
第5図 調査区全測図	11
第6図 三ヶ尻古墳群第5号墳 地形測量図	14
第7図 三ヶ尻古墳群第5号墳(1)	15
第8図 三ヶ尻古墳群第5号墳(2)	16
第9図 三ヶ尻古墳群第5号墳 墳丘出土遺物	17
第10図 三ヶ尻古墳群第5号墳 周溝出土遺物	18
第11図 第1号～第24号ビット	23
第12図 第25、26号ビット	24
第13図 ビット出土遺物	27
第14図 遺構外出土遺物	28

# 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	5
第2表 三ヶ尻古墳群第5号墳墳丘出土遺物観察表	18
第3表 三ヶ尻古墳群第5号墳周溝出土遺物観察表	20
第4表 ビット出土遺物観察表	27
第5表 遺構外出土遺物観察表	27

# 図 版 目 次

図版1 三ヶ尻古墳群第5号墳 全景(上から(奥が西))	第9図 10～19
図版2 三ヶ尻古墳群第5号墳 全景(東から)	第9図 20、21
図版3 墳丘東側 葺石検出状況(上から(奥が西))	第9図 22～29
墳丘東側 葺石検出状況	図版5 第9図 30～38
墳丘東側 断ち割り後(南東から)	第9図 39、40
図版4 墳丘東側断ち割り 壁面(南東から)	第10図 1～7
墳丘東側サブトレンチ 壁面及び葺石配列状況(北東から)	第10図 8～13
第25号ビット完掘状況(南から)	第10図 14～19
第26号ビット完掘状況(南から)	作業員 作業風景
第9図 1～9	地形測量作業風景

# I 発掘調査の概要

## (1) 調査に至る経過

平成31年3月13日付けで、嶋田 勝行氏から埼玉県教育委員会あてに、集合住宅建設に伴い、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出があった。

当該地には周知の三ヶ尻古墳群第5号墳が存在しており、今回の工事は墳丘部の一部削平が行われるものであった。

当該地に埋蔵文化財が所在する旨を届出者に回答するとともに、その保存に関する協議を重ねたが、必要最小限の削平に留めながらも計画どおり整備をする方針となったため、記録保存のための発掘調査の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、令和元年5月14日付け熊教社理第58号で、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、令和元年5月15日から開始した。

なお、埼玉県教育委員会から熊谷市教育委員会あてに、令和元年5月13日付け教文資第4-262号で発掘調査実施の指示通知があった。

## (2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、令和元年5月15日～6月30日にかけて行われた。調査面積は、364㎡であった。

調査は、①浄化槽埋設箇所、②集合住宅建設予定箇所、③三ヶ尻古墳群第5号墳墳丘削平箇所の順で実施した。

まず、①、②は遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行った。表土を剥ぎ終わったのち、遺構確認作業を行った。その際、古墳周溝、ピットなどが確認され、順次遺構の調査に着手した。

その後、③は人力による墳丘覆土の除去を行った。その後、必要箇所断面実測用のトレンチを入れ、平面、断面実測を終えたのち、必要箇所までの墳丘部の削平を行った。

そして、令和元年6月30日、調査のすべてを終了した。

整理作業は、調査終了後、令和2年5月から始めた。新型コロナウイルスによる影響で作業に遅延が生じながらではあるが、遺物の洗浄・注記を行い、順次、遺物の実測、拓本取りを行った。8月からは遺構の図面整理作業を行い、遺構・遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組を行い、令和2年11月には、原稿執筆、割付等の作業をして、報告書の印刷に入り、校正を行った後、翌年3月に本報告書を刊行した。

## (3) 発掘調査、整理・報告書作成の組織

発掘調査は令和元年度に、整理・報告書作成は令和2年度に実施し、いずれも熊谷市教育委員会が主体者となって実施した。

主体者 熊谷市教育委員会

ア 発掘調査

(令和元年度)

教育長

教育次長

社会教育課長

社会教育課担当副参事

社会教育課業務主幹(文化財保護係)

文化財保護係長

主査

主査

主査

主任

主任

主任

主事

主事

主事

野原 晃

小林 敦子

鶴田 敏男

吉野 健

宮前 彰生

松田 哲

星 祥子

小島 洋一

藏持 俊輔

山下 祐樹

腰塚 博隆

新井 端

武部 喜充

島村 範久

大野美知子

イ 整理・報告書作成

(令和2年度)

教育長

教育次長

社会教育課長

社会教育課担当副参事

主幹兼文化財保護係長

主査

主査

主任

主任

主任

主事

事務員 (任期付任用職員) 山川 守男

事務員 (任期付任用職員) 大野美知子

嘱託職員 (任期付任用職員) 磯崎 一

野原 晃

田島 斉

三友 孝二

吉野 健

松田 哲

星 祥子

小島 洋一

山下 祐樹

腰塚 博隆

新井 端

山川愛希子



## II 遺跡の立地と環境

熊谷市は、北には群馬県との県境に利根川が、南には荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、1級河川を2本有している。地形的には市の西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある。

櫛挽台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はJR高崎線籠原駅から北へ約1.5kmの西別府付近にまで延びている。標高は約35～55mを測り、東の妻沼低地に向かって緩やかに下る。荒川に面した櫛挽台地南東端には、独立丘陵地である観音山（標高81m、第3紀層）があり、台地からの比高差は約25m、沖積地からの比高差は約35mを測る。櫛挽台地の東側には、沖積世において荒川の氾濫により形成された新荒川扇状地が広がる。新荒川扇状地は、本市南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がり、自然堤防や微高地、後背湿地が発達している。

今回報告する三ヶ尻遺跡・三ヶ尻古墳群は、熊谷市西寄りの三ヶ尻地区の標高50mを測る櫛挽台地南東端に立地し、籠原駅から南へ3km、荒川は南へ約1.5kmの距離にある。調査箇所は先述した観音山の北500mに位置し、山がある南から北へ傾斜する台地の中間に位置し、近年では住宅地としての開発が目立つ場所である。

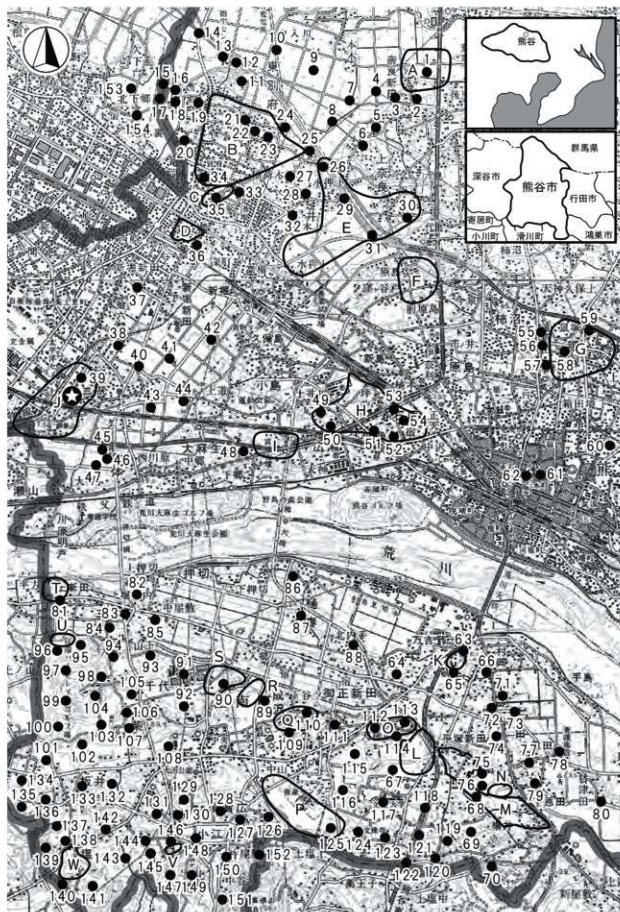
それでは、本遺跡を含む本市西部の歴史的環境について概観する（第2図、第1表）。

旧石器時代の遺跡は、熊谷市西部及び荒川右岸に多くみられ、地形的には櫛挽台地及び台地直下の妻沼低地上に集中する。旧石器時代については、櫛挽台地東端に立地する籠原裏遺跡（36）から出土した黒曜石の尖頭器のほか、萩山遺跡（92）、向原遺跡（115）、本田・東台遺跡（126）、塩西遺跡（142）、鹿嶋遺跡（117）からナイフ形石器、寺内遺跡（100）、上前原遺跡（90）、天神遺跡（101）、山神遺跡（99）、千代西原遺跡（97）で槍先形の尖頭器が検出されている。また、上前原遺跡（90）からは非北方系の細石刃核が出土し、深谷市に北方系細石刃を出土した白草遺跡（地図未掲載）がある。

縄文時代については、草創期は萩山遺跡（92）で有舌尖頭器や爪型土器が出土している。早期の遺



第1図 埼玉県の地形図



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
	熊谷市			村岡船跡	平安末
1	横塚遺跡	古墳前・平安	64	万古浦遺跡	縄文中・古墳後、平安、近世
2	東通遺跡	古墳後、奈良・平安	65	村岡北西原遺跡	平安
3	西通遺跡	古墳後	66	北西原遺跡	奈良・平安
4	中耕地遺跡	縄文中・古墳前・後、奈良・平安	67	下原遺跡	縄文、古墳後、奈良・平安、中・近世
5	上用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	68	瀬戸山遺跡	縄文早・中、古墳前・後、奈良・平安、近世
6	奈良氏船跡	平安末～中世	69	福前川原遺跡	古墳後
7	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世	70	安通寺遺跡	古墳後
8	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安	71	塚本遺跡	古墳後、奈良・平安
9	別府茶平遺跡	奈良・平安	72	西浦遺跡	奈良・平安、中世
10	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良・平安	73	豊船遺跡	奈良・平安
11	石田遺跡	縄文中・後、弥生中、古墳前	74	三分一遺跡	奈良・平安
12	間下遺跡	縄文中、弥生中、古墳後	75	原北遺跡	奈良・平安
13	横間栗遺跡	縄文後、弥生前・中、古墳前、奈良・平安、近世	76	原南遺跡	縄文中・古墳、奈良・平安
14	根結遺跡	縄文中・古墳前・後、奈良・平安	77	西内下遺跡	縄文前、弥生後、奈良・平安
15	西別府祭祀遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	78	高田遺跡	奈良・平安
16	西方遺跡	奈良・平安、中・近世	79	下恩田中町遺跡	奈良・平安
17	西別府遺跡	古墳後、奈良・平安	80	西浦町遺跡	奈良・平安
18	西別府庵寺	古墳後、奈良・平安、中・近世	81	新田裏遺跡	古墳後、奈良・平安
19	西別府船跡	平安末～中世	82	堀ノ内遺跡	中・近世
20	大竹遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	83	新屋敷遺跡	古墳後、中・近世
21	埴島遺跡	縄文中、奈良・平安	84	大津遺跡	古墳後、奈良・平安
22	野宮城跡	平安、中世	85	中屋敷遺跡	古墳、奈良・平安、中・近世
23	別府氏船跡	平安末～中世	86	平山館	中・近世
24	寺東遺跡	縄文中・後	87	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、近世
25	福向東遺跡	古墳後、奈良・平安	88	宿遺跡	奈良・平安、中・近世
26	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	89	代遺跡	縄文中、中世
27	玉井陣地跡	平安末～中世	90	上前原遺跡	旧石器、縄文早・中・後、古墳、奈良・平安
28	水俣下遺跡	古墳後	91	東原遺跡	縄文中
29	下河原中遺跡	奈良・平安	92	萩山遺跡	旧石器、縄文早・後、奈良・平安、中世
30	本代遺跡	古墳後、近世	93	宮下遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安
31	下河原上遺跡	近世	94	藤現坂遺跡	縄文中、奈良・平安、近世
32	桶筒木上遺跡	古墳後		藤現坂輪堂跡	古墳後
33	五反畑遺跡	中世	95	富士山遺跡	縄文早～後、弥生後、古墳前
34	別府三丁目遺跡	奈良・平安	96	謎ヶ沢遺跡	縄文早～後、弥生後、古墳前、奈良・平安
35	古家遺跡	奈良、奈良・平安		謎ヶ沢輪堂跡	古墳後
36	龍原裏遺跡	旧石器、縄文前・中、古墳後、平安、中・近世	97	千代西原遺跡	旧石器、縄文早～後、奈良・平安、中世
37	拾六間後遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	98	北方遺跡	縄文早～後、古墳中・後
38	樋の上遺跡	縄文前～後、古墳後、奈良・平安、中・近世	99	山神遺跡	旧石器、縄文中、中世
39	三ヶ尻遺跡	縄文中・中、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世	100	寺内(庵寺)遺跡	旧石器、縄文早・中・後、奈良・平安
40	若杉遺跡	中・近世	101	天神遺跡	旧石器、縄文、奈良・平安、中世
41	黒沢船跡	中世	102	板井中島遺跡	縄文早・後、奈良・平安、中世
42	東遺跡	平安、中世	103	西遺跡	縄文早・中、奈良・平安
43	松原遺跡	中・近世	104	天神古遺跡	縄文中、古墳前、奈良・平安
44	庚申塚遺跡	近世	105	南方遺跡	縄文早・中、中・近世
45	井裏北遺跡	中世	106	山神東遺跡	縄文中、奈良・平安
46	社裏遺跡	中世	107	久保遺跡	中・近世
47	社裏南遺跡	中世	108	原谷遺跡	縄文草創、古墳前
48	下郷遺跡	奈良・平安	109	合判山遺跡	縄文、奈良・平安、中世
49	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世	110	静庵阿遺跡	縄文、古墳、奈良・平安、中・近世
50	不二ノ橋遺跡	奈良・平安	111	成沢上原遺跡	縄文、古墳、奈良・平安
51	田向遺跡	平安	112	中原遺跡	古墳、奈良・平安
52	御蔵場跡	近世	113	天神山遺跡	縄文早・後、古墳
53	天神前遺跡	古墳後、中世	114	松原遺跡	縄文
54	兵部裏船跡	中世	115	向原遺跡	旧石器、縄文早・中、古墳
55	塚原中島遺跡	奈良・平安、近世	116	八軒遺跡	縄文、奈良・平安、中世
56	出川上遺跡	奈良・平安、中・近世	117	鹿野遺跡	旧石器、縄文早、弥生、奈良・平安、中・近世
57	塚原船跡	中世	118	下新田遺跡	縄文中・古墳、奈良・平安
58	出川下遺跡	古墳後	119	丸山浦遺跡	縄文早、古墳、奈良・平安、中世
59	八幡上遺跡	古墳後	120	丸山遺跡	縄文早・中、古墳、奈良・平安
60	箱田氏船跡	平安末～中世	121	荒神船遺跡	縄文早～後、古墳、奈良・平安
61	宮町遺跡	奈良・平安、中世	122	熊野船跡	縄文早、古墳、奈良・平安、中世
62	熊谷氏船跡	中世	123	元境内遺跡	縄文、古墳中・後、奈良・平安、中・近世

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
124	諏訪脇遺跡	縄文、古墳、奈良・平安、中・近世	152	石橋山遺跡	縄文中、古墳前
125	野原宮脇遺跡	縄文早、古墳後、奈良・平安、中・近世		深谷市	
126	本田・東台遺跡	旧石器、縄文早、古墳中・後、奈良・平安、近世	153	幡羅宮新遺跡	古墳後、奈良・平安
127	須賀広宮脇遺跡	縄文早・中、古墳後、奈良・平安	154	下郷遺跡	古墳後、奈良・平安、中世
128	田村陣屋跡	近世		古墳群	
129	小江川下原遺跡	縄文、古墳後、奈良・平安	A	奈良古墳群	古墳中～後
130	小江川上原遺跡	古墳	B	羽府古墳群	古墳後
131	田中遺跡	古墳、奈良・平安	C	在家古墳群	古墳後
132	山ノ神遺跡	縄文、奈良・平安	D	熊原裏古墳群	古墳末
133	水川遺跡	古墳、奈良・平安、中・近世	E	玉井古墳群	古墳後
134	松山遺跡	旧石器、縄文中、古墳後、奈良・平安、中世	F	原島古墳群	古墳後
135	立野遺跡	縄文早・中、古墳後、奈良・平安	G	肥塚古墳群	古墳後
136	若比田遺跡	縄文早・中、古墳後、奈良・平安	H	右原古墳群	古墳後
137	向比遺跡	縄文中、古墳、奈良・平安	I	広瀬古墳群	古墳後～末
138	荒井遺跡	古墳	J	三ヶ尻古墳群	古墳後
139	堀山原遺跡	古墳	K	村岡古墳群	古墳後
140	堀新田遺跡	縄文早～中、古墳後	L	乃古下原古墳群	古墳前・後
141	諸ヶ谷遺跡	縄文中、古墳前・後	M	瀬川山古墳群	古墳後～末
142	堀西遺跡	旧石器、縄文中、古墳前・後、奈良・平安、中・近世	N	原古墳群	古墳後
143	堀丸山遺跡	旧石器、縄文中・後、古墳前、奈良・平安、中・近世	O	天神山古墳群	古墳後
144	船川遺跡	縄文早・中、古墳前	P	野原古墳群	古墳後
145	新山遺跡	縄文早・中、古墳前、近世	Q	静徳院古墳群	古墳後
146	内神遺跡	縄文中、古墳前	R	人塚古墳群（遺跡）	古墳前・後
147	富士塚遺跡	近世	S	上前原古墳群	古墳後
148	諏訪木遺跡	古墳前、奈良・平安	T	新田裏古墳群	古墳後～末
149	茶嶋遺跡	古墳前、中・近世	U	壁ヶ尻古墳群	古墳後
150	津畑遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	V	西古墳群	古墳後
151	前谷遺跡	近世	W	臨古墳群	古墳前・後

跡は、江南台地東部に多く見られる。県内有数の集落跡の萩山遺跡（92）において、スタンプ型石器が200点以上検出され、船川遺跡（144）では、竹之内式と呼称される貝殻沈線文土器が出土し、山形押型文土器・無文土器との相伴関係が確認されている。他には、鹿嶋遺跡（117）、野原宮脇遺跡（125）、南方遺跡（105）で燃糸文期後半の住居跡が検出されている。続いて前期は、次第に遺跡数が増え始め、江南台地以外の三ヶ尻遺跡（39）で集落跡が確認される。江南台地では人々の生活痕跡は西部に移り、富士山遺跡（95）で諸磯期の住居跡を3軒検出するのみである。中期になると遺跡数が大幅に増え、特に中期後半の加曾利E式期の遺跡が多い。前期と異なり、台地以外に低地上にも集落跡が確認されるようになるが、特に櫛挽台地北東端及び台地下の低地上に集中する。一方で、引き続き江南台地上の権現坂遺跡（94）、富士山遺跡（95）、寺内遺跡（100）、上前原遺跡（90）などで加曾利E式期の住居跡が見られる。後期になると遺跡数は減少し、妻沼低地へと移る傾向が見られる。西城切通遺跡（地図未掲載）、場邊ヶ谷戸遺跡（地図未掲載）など櫛挽台地から離れた低地上でも遺跡が認められるようになる。屋外埋甕が、宮下遺跡（93）、萩山遺跡（92）で確認されているが、いずれも遺跡は小規模である。

晩期は、遺跡数がさらに減少する。地図中にはないが、市東部では低地上に立地する諏訪木遺跡や中西遺跡で集落跡が確認されている。台地上（江南台地）では活動の痕跡をほとんど認めることができない。

弥生時代前期末～中期前半の遺跡は、櫛挽台地北東端及び台地下の低地上に集中するが、再葬墓が多く確認されている。横間栗遺跡（13）では、前期末から中期前半までの再葬墓が13基確認されており、その一部は埼玉県指定になっている。深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）などでも再葬墓が検出されており、県内初の達賀川式土器の壺胴部片も出土している。中期中葉以降は、一変して市東部の低地上に集落が出現する。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（地図未掲載）や、その墓域とされ最古

段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（地図未掲載）など、集落が本格的に展開されるようになる。しかし、市北部及び西部では確認例が少なく、深谷市市戸東遺跡（地図未掲載）など後期の遺跡がいくつか点在するのみである。江南台地上では、姥ヶ沢遺跡（96）及び富士山遺跡（95）が後期の集落として僅かに確認されている。

古墳時代になると低地上への進出がより活発化し、低地帯の自然堤防上にも営まれるようになり前期の遺跡は確認例が増加している。塩古墳群（W）は、古墳時代前期を代表する古墳群で、7つの支群により構成され、前方後方墳2基、方墳26基、円墳8基からなる。一部は県指定史跡になっている。一本木前遺跡（7）では、約100軒もの膨大な数の住居跡の他に4基の方形周溝墓が確認されており、うち1基の方形周溝墓の主体部からはヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯などが検出されている。江南台地上の行人塚遺跡（R）からは、鍛冶関連遺物が出土し、県内でも早い段階での製鉄技術の導入がわかる遺跡である。中期は他の時期と比較し、確認例が少なく、市東部では集落跡が確認されているが、それ以外では市指定史跡である横塚山古墳（A：奈良古墳群）があるのみである。帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は国道整備に伴い一部削平されている。後期以降は、遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は大規模になり、低地上にも多数出現する。そして、これらの集落跡は増減はするものの奈良・平安時代へと継続するものが多い。一方、古墳は群集して形成され、台地や低地上に築造されている。古墳群は、概ね6世紀から7世紀末ないしは8世紀初頭にかけて築造されたが、在家古墳群（C）、龍原裏古墳群（D）は埴輪を持たないものもある。また、姥ヶ沢埴輪窯跡群（96）及び権現坂埴輪窯跡群（94）は生産遺跡であり、台地崖線部の斜面や台地上の平坦地を利用した遺跡である。これら2箇所の埴輪窯は、6世紀前半から後半まで続き、周辺の古墳へ埴輪を供給していた。特に権現坂埴輪窯跡群では、高さ70cmを超す大型の円筒埴輪が作られており、埼玉古墳群への供給も行われていた可能性が考えられている。終末期には、龍原裏古墳群（D）で墳形が八角形を呈する古墳が検出されたことなどが挙げられ、国指定史跡である幡羅官衙遺跡群（西別府祭祀遺跡（15）、西別府遺跡（17）、西別府廃寺（18）、幡羅官衙遺跡（153））と時期・地理で関連性が考えられ、注目に値する古墳群と考えられる。

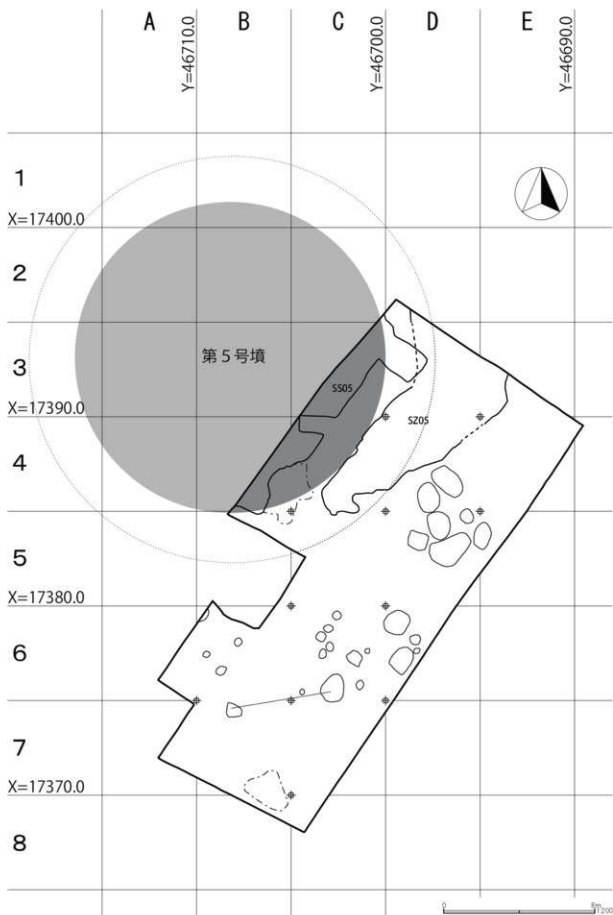
続いて奈良・平安時代では、律令体制の導入に伴い、熊谷市北西部と深谷市東部を含む一帯は、武蔵国幡羅郡に属したと考えられる。郡は上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡である。深谷市幡羅官衙遺跡（153）は、東西500m、南北400mの範囲をもつ幡羅郡家跡であり、これまでに郡庁を除く正倉、館、厨家、曹司、道路等の施設が検出され、7世紀後半に小規模な倉庫などの掘立柱建物が建てられ、7世紀末には主要な施設が整えられていったようである。そして、8世紀末には正倉の掘立柱建物から礎石建物への建て替えや敷地の拡張などが行われ、9世紀前半～中葉には二重溝と土塁による区画施設が造られ郡家の様相も大きく変化する。この施設は、10世紀前半または中頃の正倉院の廃絶後の11世紀前半まで存続していたとされ、これが郡家の終焉と考えられている。また、この幡羅官衙遺跡周辺には、西別府遺跡（17）、西別府廃寺（18）、西別府祭祀遺跡（15）が所在し、郡家との関連で注目されており、2018年2月にはこの内の、幡羅官衙遺跡と西別府祭祀遺跡が国史跡「幡羅官衙遺跡群」として指定されている。西別府遺跡は、幡羅官衙遺跡と一体の遺跡と捉えることができ、幡羅官衙遺跡と同様な9世紀後半から11世紀前半まで存在していたと考えられる二重溝と土塁による区画施設が確認され、幡羅郡家の機能の一部を担っていたと考えられている。西別府廃寺は、郡司が創

建に関わったとされる県内でも古い8世紀初頭創建の寺院であり、基壇建物跡、寺域を区画する溝跡、瓦溜り状遺構、中門などが検出され、多数出土している軒丸瓦や軒平瓦などから9世紀後半まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、7世紀後半から11世紀前半まで湧泉で行われた水辺の祭祀跡で、現在に至るまでその様相を保っている遺跡である。石製模造品から墨書土器に至る多数の祭祀遺物が検出されており、祭祀具や場所を時代とともに変えて祭祀が継続的に行われていたと考えられる。なお、西別府祭祀遺跡の北西の妻沼低地上の本郷前東遺跡・新屋敷東遺跡では、河川跡の縁辺部で7世紀前半の土器と共伴する石製模造品が出土し、集落内の祭祀跡においても、石製模造品が出土しており、水利にかかわる再生を祈願した水の祭祀と理解され、西別府祭祀遺跡へと続く祭祀の前段階の時期のものとして注目される。一方、荒川右岸の江南台地上では、8世紀前半から10世紀半ばの時期の古代寺院である寺内庵寺(100)が確認され、「花寺」の名を印した墨書土器を検出したほか、寺院の周囲を外界と区切る大溝、伽藍内には基壇をもつ建物跡が4棟検出され、伽藍の東側には50軒以上の集落、南側には参道と推定される道路跡も確認されている。この寺内庵寺に隣接する深谷市百済木遺跡(地図未掲載)では、8世紀初頭に位置づけられる豪族居室跡と考えられる遺構が検出されている。よって、両遺跡とも古代男衾郡の成立を推定する上で重要な位置付けがなされている。

平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも館跡が多数みられる。市北部では実盛館、西城城跡、東城城跡(いずれも地図未掲載)、市西部では西別府館跡(19)、別府氏館跡(23)、奈良氏館跡(6)、市中央付近では兵部裏屋敷跡(54)などがあるが、その実態は不明なものが多い。市西部の東別府地区にある別府城跡(22)では、現在も方形の敷地に土塁と空堀が一部残っている。三ヶ尻地区では、中世の遺構・遺物が比較的多く検出されている。中でも黒沢館跡(41)は発掘調査の結果、出隅を持ち全周する堀と土塁、虎口などが検出され、渡辺華山が記した文献『訪録録』所収の「黒沢屋敷」の記述と発掘調査成果が一致するという大変貴重な例である。この周辺には、武蔵国国府から官道への南北ルートとして知られる東山道武蔵路が通っていたと想定されており、古代以降も古街道として、鎌倉道の一つと伝わるなど、地域の主要道としても長く使用されていたことが推定される。中世段階においては、館跡などを中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。このことは、近世段階においても同様で、市内ではいくつかの確認例があるが、不明点が多いというのが実状である。今後の調査成果によるところが多く、情報の蓄積に期待するところであろう。

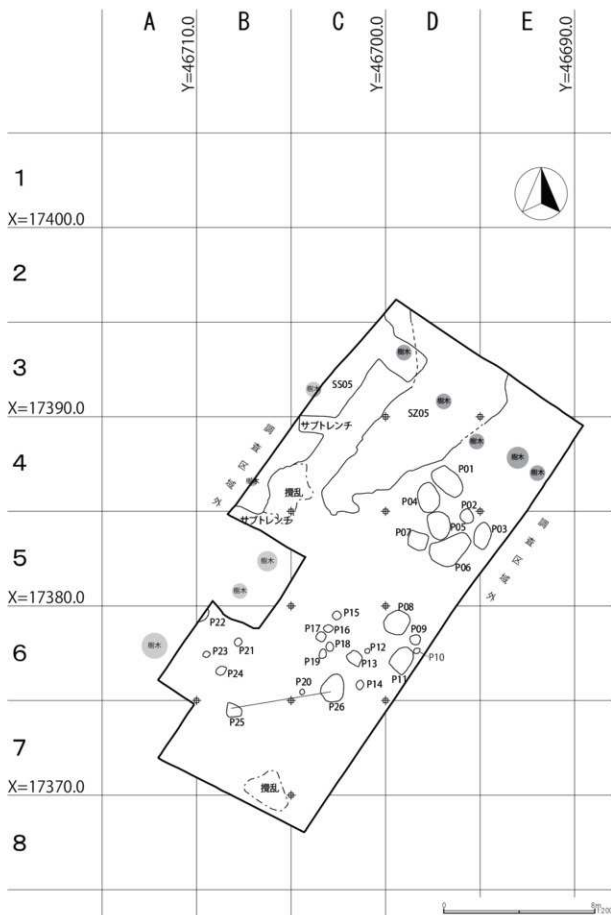


第3図 調査地点位置図



第4図 ミツエツボ古墳群第5号墳 墳丘位置図





第5図 調査区全測図

### Ⅲ 遺跡の概要

#### (1) 三ヶ尻遺跡、三ヶ尻古墳群について

今回報告する三ヶ尻地区では、昭和35年に小澤 國平によって1基の発掘調査を最初とし、幾重にわたり発掘調査が行われている。遺跡は、縄文時代前期から中近世に至るまで連続して人々の営みが確認できる集落が検出されている。現在では一括して三ヶ尻遺跡だが、発掘調査が行われたのは、「三ヶ尻天王遺跡」、「三ヶ尻林遺跡」、「三尻中学校遺跡」、「天王遺跡」、後述する三ヶ尻古墳群であり、三ヶ尻地区に所在するこれらの「遺跡」は、元来、それぞれ別の「遺跡」として認識されていたが、調査結果から判断すると、遺跡は縄文時代前期以降続く集落跡と古墳時代後期の古墳群に分けることができた。そのことからこれまでの「遺跡」をすべて統一し、「三ヶ尻遺跡」として平成8年に遺跡範囲の修正を行った。なお、これら調査の詳細は三ヶ尻遺跡Ⅰで概要を述べていることからここでは割愛させていただく。

一方、三ヶ尻古墳群はかつては多くの古墳が存在していたことが知られており、現在までの調査で64基確認されているが、実際に築造された古墳の総数は100基を超えていたものと推定される。

発掘調査は、昭和35年の小澤 國平による三ヶ尻林裏古墳の調査から始まり、昭和54、55年には、埼玉県埋蔵文化財調査事業団による上越新幹線建設工事に伴い、宇天王において6基、宇林において16基の古墳と1基の箱式石棺の調査が行われた。

熊谷市教育委員会においては、昭和54年に三ヶ尻80号墳、平成27年度に三ヶ尻古墳群第63、64号墳、平成30年に三ヶ尻古墳群稲荷塚古墳の発掘調査が実施されている。

#### (2) 調査の方法

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をA-1として東へA・B・C、南へ1・2・3とし、Aラインは北から南へA-1・A-2・A-3・・・と呼称した。Bライン以東もAラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

なお、座標は、周辺の過去の発掘調査地点との照会を容易にするため、世界測地系による国家方眼座標に基づく基準点測量による。

重機による表土剥ぎを実施し、その後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。原則として、遺物は必要に応じて写真撮影後、遺構ごと一括して慎重に取り上げた。遺構は、写真撮影した後、実測を行った。そして、最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

#### (3) 検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、三ヶ尻古墳群5号墳の周溝1条、ピット26基である。

周溝は墳丘の東溝と判断でき、墳丘の南で溝は立ち上ることから、墳丘南端にブリッジをもつ。周辺にはピットが複数基検出され、うち2基は柱穴と推定され、その位置から柱状の建物跡があったこと

が考えられる。

遺物については古墳時代後期に属する墳丘から転落したであろう埴輪片、その後、中世以降の土人形、焙烙などが検出している。

検出した遺物量はコンテナ（大きさ：縦 34 cm、横 54 cm、深さ 15 cm）にして 1 箱であった。以下、調査の詳細を述べる。

## IV 遺構と遺物

### 1 墳丘

#### 第 5 号墳（第 6～8 図）

##### 位置・状態

B-4・5、C-2～5、D-2～4、E-3・4 グリッドに位置する。現在確認されている三ヶ尻古墳群では周辺には、南約 20 m にやねや塚古墳、南東 22 m に経塚古墳、8 号墳があり、北東約 20 m に平成 30 年度調査の稲荷塚古墳がある。

検出状況は、西側と南側が後世に削平を、北側はやや崩落しているが、墳丘はほぼ完存しており、主体部も現存しているものと考えられる。本調査は墳丘東側部分の一部のみであり、それ以外の墳丘の大部分は調査区域外である。

##### 墳丘・外部施設

墳丘規模は標高 56 m、高さ 3.56 m、直径 16.4 m 前後である。軸は N-9.42° -W を指す。墳頂部、墳丘北、西、南側はわずかに削平されていたが、ほぼ完存している。

葺石は墳丘、及び周溝内その周辺より検出されたが、その多くが散逸しており、原位置を留めていたものはわずかであった。東側テラス部分で 1.5 m × 1.2 m の範囲で現存している葺石が唯一確認でき、その配列は、まず長軸（40 cm 程度）が長い礫を墳丘斜面に対し直角方向に刺すように埋め込んでおり、それを等間隔で配列し、その隙間に 20～30 cm 程度の礫を敷き詰めるといった規則性がみられた。残存する葺石から推定し、周辺の古墳と同様に 2 段築成で、本墳丘ではその下段に配列した葺石の一部が検出された。

断面観察から墳丘は版築工法で築造されており、確認できるだけで、最大 7 層にわたり築き固めている。下から黒褐色、オリーブ褐色、黒褐色、ソフトローム土、黒色、オリーブ褐色、にぶい黄褐色の順で、いずれもソフトローム土や黒色土などが多く混ざり、4 層以下はしまりが強い。

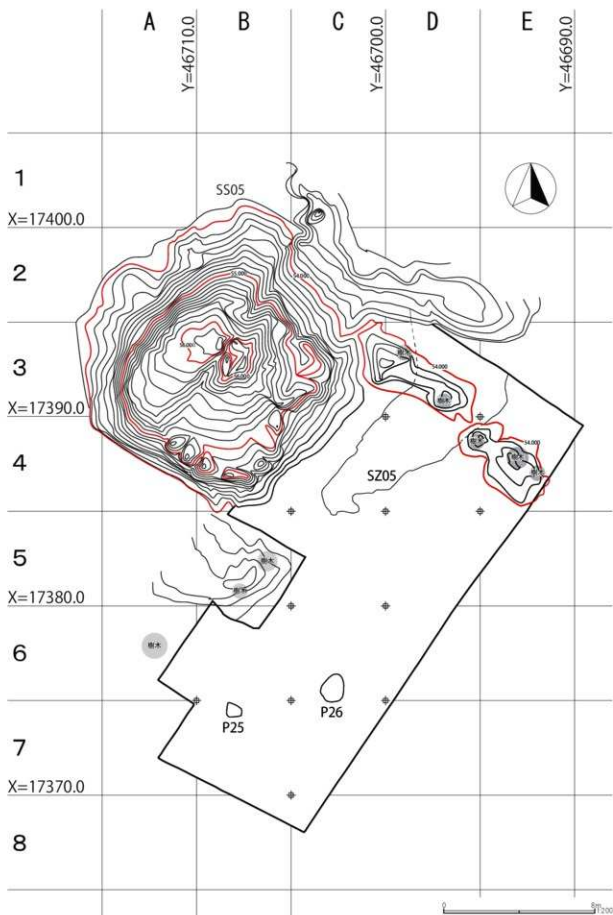
周溝は調査範囲内で東溝のみ検出し、南側には墳丘へのブリッジ部が確認できる。検出長 11.2 m、幅 5.0～1.46 m、確認面からの深さは 0.3 m と非常に浅い。平面プランは円形ではなく、いびつな掘り方と推定され、北へ向かうにつれ溝幅は広がる。底部は小礫が多量に検出されたが、周辺の調査状況から確認面に小礫を含む地形であることがわかる。なお、墳丘からの転落による葺石、埴輪片がその小礫の直上に検出している。

##### 出土遺物

出土遺物は、墳丘から円筒埴輪片、形象埴輪片、土人形、打製石斧が検出している。

周溝からは円筒埴輪片、形象埴輪片、焙烙が検出している。

古墳時代後期（6 世紀後半～7 世紀初頭）の築造と思われる。

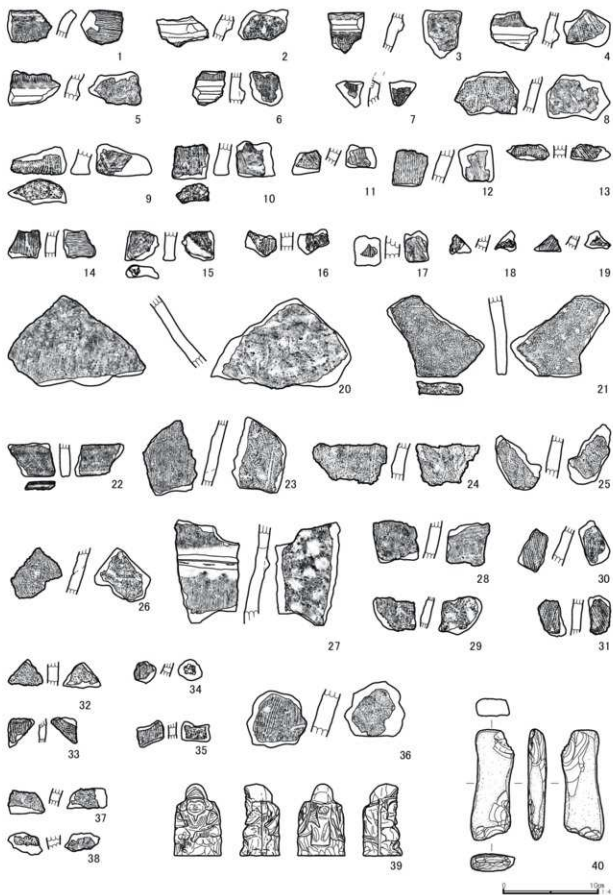


第6図 三ヶ尻古墳群第5号墳 地形測量図

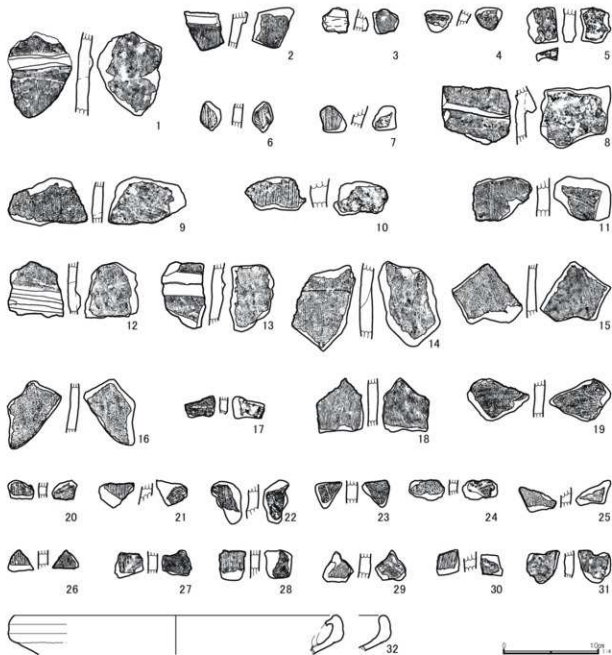


第7図 三ヶ尻古墳群第5号墳(1)





第9圖 三ヶ尻古墳群第5号墳 墳丘出土遺物



第10図 三ヶ尻古墳群第5号墳 周溝出土遺物

第2表 三ヶ尻古墳群第5号墳 墳丘出土遺物観察表 (第9図)

遺物名	No	器種	口径	器高	底径	胎土	色澤	構成	残存率	手法、形質の特徴等	備考
SS05	1	円筒埴輪	-	(2.9)	-	ARIHM	明赤陶 2.5YR5/6	A	1/3輪部片	外面：縦位ハケ目、口縁部はコナ字 内面：縦位ハケ目	
SS05	2	円筒埴輪	-	(2.8)	-	ABFCHLM	橙 5YR6/6	A	胴部片	外面：下部縦位ハケ目、突帯部有 突帯部断面台形を呈する	胎土に白色封状物質有
SS05	3	円筒埴輪	-	(4.2)	-	ABCM	明赤陶 2.5YR5/6	A	胴部片	外面：縦位ハケ目、突帯部有 突帯部断面台形を呈する	
SS05	4	円筒埴輪	-	(3.9)	-	ARLM	明赤陶 2.5YR5/6	A	胴部片	外面：突帯部有、突帯部上動位ハケ目 内面：斜位ハケ目 突帯部断面台形を呈する	
SS05	5	円筒埴輪	-	(2.8)	-	ABFHM	明赤陶 5YR5/6	A	胴部片	外面：縦位ハケ目、突帯部有 内面：輪縁み線有 突帯部断面台形を呈する	胎土白色封状物質有



品名	No	品種	口径	部高	底径	取手	色調	組成	残存率	手法、形態の特徴等	備考	
SS05	6	円筒形輪	-	(3.3)	-	AMN	橙 5YR6/6	A	輪郭片	外面：縦位ハウ目、変形部有 内面：ナデ 変形部断面を呈する		
SS05	7	円筒形輪	-	(2.7)	-	ABGLM	明赤褐 2.5YR5/6	A	透孔部片	外面：透孔部、縦位ハウ目		
SS05	8	円筒形輪	-	(3.8)	-	ABFCM	明赤褐 2.5YR5/6	A		外面：縦位ハウ目、上端部変形部へつ 調整痕の一部有 内面：へうナデ、当て具痕有	胎土に白色粒状物質含	
SS05	9	円筒形輪	-	(2.2)	-	ABGM	にぶい赤褐 5YR5/4	A	底面片	外面：縦位ハウ目 内面：縦位ハウ目後一部ナデ調整痕有		
SS05	10	円筒形輪	-	(3.4)	-	ABDM	にぶい橙 7.5YR6/4	A	底面片	内外面：縦位ハウ目		
SS05	11	円筒形輪	-	(1.8)	-	ABDM	明赤褐 2.5YR5/6	A		外面：斜位ハウ目 内面：縦位ハウ目		
SS05	12	円筒形輪	-	(3.5)	-	ABG	明赤褐 5YR5/6	A		外面：縦位ハウ目		
SS05	13	円筒形輪	-	(1.4)	-	AGMN	赤褐 5YR4/6	A		外面：縦位ハウ目 内面：斜位ハウ目		
SS05	14	円筒形輪	-	(2.8)	-	AMN	赤褐 5YR4/8	A		外面：縦位ハウ目、上端ナデ消し痕有 内面：縦位ハウ目		
SS05	15	円筒形輪	-	(3.0)	-	ABKMN	橙 2.5YR6/6	A	底面片	外面：縦位ハウ目 内面：斜位ハウ目	胎土に角閃石含	
SS05	16	円筒形輪	-	(1.9)	-	AGMN	灰褐 5YR6/2	A		外面：縦位ハウ目 内面：斜位ハウ目、ナデ		
SS05	17	円筒形輪	-	(2.4)	-	AFM	にぶい橙 5YR6/3	A	底面片	外面：縦位ハウ目、周辺磨蝕 内面：ハケ目、ナデ 白色粒状物質含む		
SS05	18	円筒形輪	-	(1.8)	-	ABEILM	明赤褐 2.5YR5/6	A		外面：縦位ハウ目		
SS05	19	円筒形輪	-	(1.4)	-	ABFM	明赤褐 2.5YR5/6	A		外面：縦位ハウ目	胎土に白色粒状物質含	
SS05	20	形象輪	-	(7.6)	-	ABJM	にぶい褐 7.5YR5/4	A	厚輪片	外面：縦位ハウ目 内面：縦位ハウ目後ナデ調整痕有、ア ナデ具痕有	家の屋根	
SS05	21	形象輪	-	(8.4)	-	AEGMN	にぶい橙 7.5YR6/4	A	馬の蹄痕 部	内外面：ナデ、わずかにアテ具痕有		
SS05	22	形象輪	-	(3.5)	-	AEGM	にぶい橙 7.5YR6/4	A	馬の蹄痕 部	内外面：ナデ 内面：底部指ナデ調整痕有		
SS05	23	形象輪	-	(6.9)	-	ABGLMN	外面：橙 5YR6/6 内面：明赤褐 5YR5/6	A	調整時?	外面：縦位ハウ目 内面：斜位ハウ目、へう状工具アテ具 痕、輪郭み痕有	馬の蹄痕?	
SS05	24	形象輪	-	(3.9)	-	ABDCM	にぶい褐 7.5Y5/4	A		外面：縦位ハウ目 内面：斜位ハウ目後一部ナデ調整痕有	馬の蹄痕?	
SS05	25	形象輪	-	(4.5)	-	ABGJRLM	橙 5YR6/6	A		外面：縦位ハウ目 内面：縦位ハウ目	胎土に角閃石含、馬の蹄痕?	
SS05	26	形象輪	-	(4.8)	-	ABGHJRLMN	明赤褐 5YR5/6	A	調整時?	外面：縦位ハウ目 内面：ナデ、輪郭み痕有	胎土に角閃石含、馬の蹄痕?	
SS05	27	形象輪	-	(10.5)	-	ABJM	明赤褐 5YR5/6	A	空白部片	外面：縦位ハウ目、変形部有 内面：縦位ハウ目後ナデ調整痕有 変形部断面二角形を有する、透孔有	胎土に角閃石含	
SS05	28	形象輪	-	(4.0)	-	ABJMN	にぶい赤褐 5YR5/4	A		外面：縦位ハウ目 内面：縦位ハウ目		
SS05	29	形象輪	-	(3.4)	-	ABJM	外面：明赤褐 5YR5/6 内面：にぶい黄褐 10YR5/4	A		外面：ナデ調整痕有		
SS05	30	形象輪	-	(4.2)	-	ABJM	赤褐 5YR4/6	A		内外面：縦位ハウ目		
SS05	31	形象輪	-	(3.9)	-	GM	赤褐 5YR4/8	A		外面：縦位ハウ目 内面：斜位ハウ目		
SS05	32	形象輪	-	(2.6)	-	BGM	にぶい橙 7.5YR6/4	A		外面：斜位ハウ目 内面：ハケ目		
SS05	33	形象輪	-	(2.5)	-	AGM	橙 2.5YR6/6	A		外面：縦位ハウ目 内面：縦位ハウ目		
SS05	34	形象輪	-	(1.5)	-	ABM	にぶい赤褐 5YR5/4	A		外面：縦位ハウ目		
SS05	35	形象輪	-	(1.7)	-	ABJRM	明赤褐 2.5YR5/6	A		外面：縦位ハウ目	胎土に角閃石含	
SS05	36	形象輪	-	(5.0)	-	ABGJRLMN	外面：橙 5YR6/6 内面：明赤褐 5YR5/6	A		外面：縦位ハウ目	胎土に角閃石含	
SS05	37	形象輪	-	(1.9)	-	ABGJRLM	橙 5YR6/6	A		外面：縦位ハウ目後指ナデ調整痕有	胎土に角閃石含	
SS05	38	形象輪	-	(1.5)	-	ABGHJRLMN	明赤褐 5YR5/6	A		外面：縦位ハウ目	胎土に角閃石含	
SS05	39	土人形(素 土)	-	7.6	4.9 × 4.1	ABG	橙 5YR7/6	B	ほぼ 100%	底面：指ナデ有	後部に斜に設置したものか	
SS05	40	打製石片	最大長	11.6	最大幅	4.2	最大厚	1.9	重量	145.1g	100%	石村：黒色頁岩 柄部断面は磨光のままで調整は無し

第3表 三ヶ尻古墳群第5号墳 周溝出土遺物観察表 (第10図)

遺物名	No.	部種	口径	部高	底径	出土	色澤	構成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
SZ05	1	円筒陶輪	-	(8.0)	-	AEGMN	橙 5YR6/6	A	製法	外面：縦位ハケ目、突部直有 内面：斜位ナデ 変形部断面台形を呈する。接合部分で割れている	甕土に角閃石を含む
SZ05	2	円筒陶輪	-	(3.0)	-	AM	外面：明赤褐 2.5YR5/6 内面：赤褐 5YR4/6	A	製法片	外面：縦位ハケ目、突部直有 内面：ナデ調整直有 変形部断面台形を呈する	
SZ05	3	円筒陶輪	-	(2.4)	-	ABLM	明赤褐 2.5YR5/6	A	突部直	一部欠損するも変形部断面台形を呈する	
SZ05	4	円筒陶輪	-	(1.7)	-	ABDMN	明赤褐 2.5YR5/6	A		外面：横位ナデ 内面：縦位ハケ目	突部直下か
SZ05	5	円筒陶輪	-	(3.5)	-	AEM	にぶい・橙 7.5YR7/4	A	底面	内外面：ナデ	
SZ05	6	円筒陶輪	-	(3.0)	-	AM	にぶい・赤褐 5YR5/3	A		外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目 内面：横位ハケ目	
SZ05	7	円筒陶輪	-	(2.3)	-	ABMN	にぶい・赤褐 5YR4/4	A		外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目	
SZ05	8	形象陶輪	-	(6.2)	-	ABEJMN	外面：橙 5YR6/8 内面：黄灰 2.5Y5/1	A	突部部分	外面：縦位ハケ目 内面：ナデ調整直有。断面割れている 突部経り返し部分へウ状工具による調整直有	甕土に角閃石含む
SZ05	9	形象陶輪	-	(4.8)	-	AEGM	浅黄褐 10YR8/4	A	部部?	外面：縦位ハケ目 内面：ナデ	男の部?
SZ05	10	形象陶輪	-	(3.0)	-	AMN	外面：橙 7.5YR7/6 内面：明赤褐 2.5YR5/6	A	部部	外面：縦位ハケ目 内面：ナデ	男の部部
SZ05	11	形象陶輪	-	(4.1)	-	AJLMN	外面：橙 5YR6/6 内面：橙 2.5YR6/6	A	部部	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目、指調整直有	男の部部
SZ05	12	形象陶輪	-	(5.0)	-	AEGM	にぶい・橙 7.5YR7/4	A		外面：縦位ハケ目、突部直有 内面：ナデ 変形部断面台形を呈する。接合部分で割れていると思われる	
SZ05	13	形象陶輪	-	(6.6)	-	ABDJKM	橙 2.5YR6/6	A	製法片	外面：縦位ハケ目、突部直有 内面：ナデ 透孔有。変形部断面三角形を呈する	甕土に角閃石含む
SZ05	14	形象陶輪	-	(8.0)	-	ABKMN	明赤褐 2.5YR5/6	A	右部片	外面：縦位ハケ目 内面：縦位ハケ目後ナデ 断面及び外面輪縁直有	甕土に角閃石含む
SZ05	15	形象陶輪	-	(5.5)	-	ABKM	にぶい・赤褐 5YR5/4	A		外面：縦位ハケ目 内面：縦位ハケ目後ナデ 内面：斜位ハケ目後ナデ	甕土に角閃石含む
SZ05	16	形象陶輪	-	(5.1)	-	ABJKM	明赤褐 5YR5/6	A		外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目後ナデ	甕土に角閃石含む
SZ05	17	形象陶輪	-	(1.8)	-	ABDJKMN	にぶい・赤褐 5YR5/4	B	下部直有	外面：縦位ハケ目、一部割ナデ直有	
SZ05	18	形象陶輪	-	(5.1)	-	AMN	明赤褐 2.5YR5/8	A		外面：縦位ハケ目後ナデ 内面：縦位ハケ目後ナデ	甕土に角閃石含む
SZ05	19	形象陶輪	-	(3.0)	-	ABDJKMN	明赤褐 2.5YR5/6	A		外面：縦位ハケ目 内面：縦位ハケ目	甕土に角閃石含む
SZ05	20	形象陶輪?	-	(1.6)	-	AM	明赤褐 2.5YR5/6	A		外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目	
SZ05	21	形象陶輪	-	(2.4)	-	AEM	明赤褐 5YR5/6	A		外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目	
SZ05	22	形象陶輪	-	(3.5)	-	ABCKM	にぶい・橙 7.5YR7/4	A		外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目	甕土に角閃石含む
SZ05	23	形象陶輪	-	(2.4)	-	ABDKM	にぶい・橙 7.5YR7/4	A		外面：工具直有 内面：斜位ハケ目	甕土に角閃石含む
SZ05	24	形象陶輪	-	(2.1)	-	AJM	外面：にぶい・橙 7.5YR7/4 内面：橙 5YR6/6	A		外面：縦位ハケ目 内面：縦位ハケ目	
SZ05	25	形象陶輪	-	(2.7)	-	AM	明赤褐 7.5YR5/6	A		外面：斜位ハケ目 内面：縦位ハケ目	
SZ05	26	形象陶輪	-	(2.0)	-	ABMN	明赤褐 2.5YR5/6	A		外面：縦位ハケ目 内面：ナデ	
SZ05	27	形象陶輪	-	(2.3)	-	AIM	明赤褐 2.5YR5/6	A		外面：縦位ハケ目 内面：ナデ	
SZ05	28	形象陶輪	-	(3.0)	-	AM	外面：明赤褐 2.5YR5/6 内面：にぶい・赤褐 2.5YR5/4	A		外面：縦位ハケ目 内面：ナデ	
SZ05	29	形象陶輪	-	(3.2)	-	AEMN	にぶい・橙 5YR6/4	A		外面：斜位ハケ目、ナデ 内面：ナデ	
SZ05	30	形象陶輪?	-	(2.2)	-	AIM	明赤褐 5YR5/6	A		外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目	
SZ05	31	形象陶輪	-	(3.6)	-	AM	にぶい・橙 5YR7/4	A		外面：斜位ハケ目、ナデ 内面：ハケ目	
SZ05	32	短筒	(3.4)	(4.1)	-	ABDJKL	橙 5YR6/6	A	把手部片	内外面：わずかにスス付着 内直有	

## 2 ビット

墳丘周辺にはビットが26基検出されたが、その大部分は用途不明のものである。うち第25、26号ビットは柱穴と推定され、その位置から柱状の建物跡があったことが考えられる。

### 第1号ビット（第11図）

D-4グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で1.9m、短軸で1.1mを測り、深さは0.16mである。  
平面プランについては、やや西に傾く南北に長いびつな方形を呈するものである。  
掘り込みは緩やかなレンズ状であり、底部は平坦で、小礫が複数確認できる。  
出土遺物は、確認できなかった。

### 第2号ビット（第11図）

D-4・5グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.78m、短軸で0.7mを測り、深さは0.21mである。  
平面プランについては、ややいびつな円形を呈するものである。  
掘り込みは両壁面ともほぼ垂直の落ち込みを掘ったのち、中央にレンズ状の落ち込みをもつ。  
底部は丸く、床面を中心に覆土内には複数の小礫を含む。  
出土遺物は、1点のみ形象埴輪と思われる破片を検出した。第5号墳墳丘からの流れ込みである。

### 第3号ビット（第11図）

D・E-5グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で1.43m、短軸で0.9mを測り、深さは0.17mである。  
平面プランについては、南北に長いびつな方形を呈するものである。  
掘り込みは西壁が垂直に落ちるレンズ状の掘り込みであり、底部は起伏があり、床面には北側を中心に複数の小礫を含む。  
出土遺物は、1点のみ形象埴輪と思われる破片を検出した。第5号墳墳丘からの流れ込みである。

### 第4号ビット（第11図）

D-4・5グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはないが、第5号ビットと接する。  
規模は、長軸で1.56m、短軸で1.15mを測り、深さは0.12mである。  
平面プランについては、いびつな楕円形を呈するものである。  
掘り込みは浅く、北側に鋭角な落ち込みをもち、南へ立ち上がっていく掘り込みであり、底部は起伏があり、床面には南側を中心に複数の小礫を含む。  
出土遺物は、確認できなかった。

#### 第5号ピット (第11図)

D-5グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはないが、第4、6号ピットと接する。規模は、長軸で1.51 m、短軸で1.14 mを測り、深さは0.14 mである。平面プランについては、いびつな楕円形を呈するものである。掘り込みはレンズ状の落ち込みをもち、底部は起伏があり、床面には北側を中心に複数の小礫を含む。出土遺物は、確認できなかった。

#### 第6号ピット (第11図)

D-5グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはないが、第5号ピットと接する。規模は、長軸で2.29 m、短軸で1.36 mを測り、深さは0.13 mである。平面プランについては、不整形な楕円を呈するものである。掘り込みは両壁面とも垂直の落ち込みをもち、底部は平坦であり、床面には複数の小礫を含む。出土遺物は、打製石斧が1点検出された。

#### 第7号ピット (第11図)

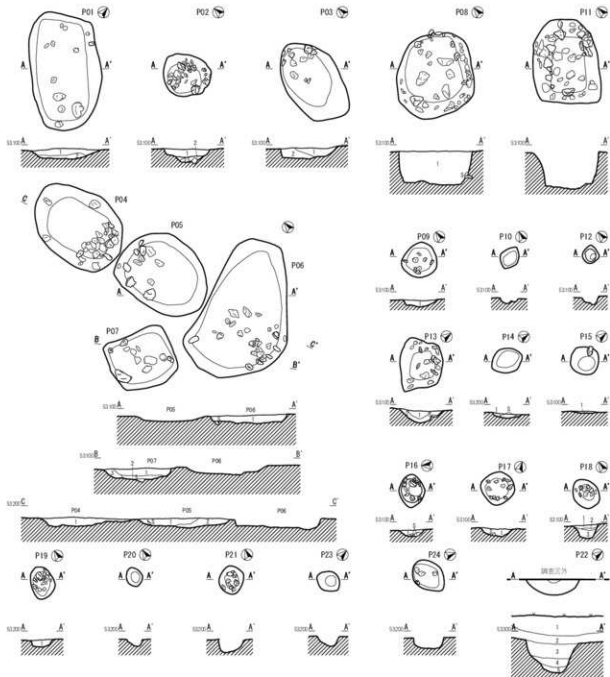
D-5グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。規模は、長軸で1.04 m、短軸で0.89 mを測り、深さは0.18 mである。平面プランについては、方形を呈するものである。掘り込みは両壁面ともやや垂直の落ち込みをもち、底部は平坦であり、床面には複数の小礫を含む。断面観察から、覆土は3層あり、人工的な埋土と推定される。出土遺物は、確認できなかった。

#### 第8号ピット (第11図)

C・D-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。規模は、長軸で1.43 m、短軸で1.24 mを測り、深さは0.52 mである。平面プランについては、不整形な楕円を呈するものである。掘り込みは両壁面とも垂直の落ち込みをもち、底部は平坦であり、床面には複数の小礫を含む。断面観察から、覆土は人工的な埋土と推定される。出土遺物は、近代瓦片が数点検出されたが、図化しなかった。

#### 第9号ピット (第11図)

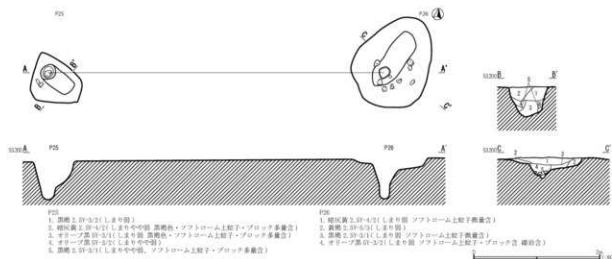
D-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。規模は、長軸で0.56 m、短軸で0.53 mを測り、深さは0.1 mである。平面プランについては、楕円形を呈するものである。掘り込みはレンズ状の落ち込みをもち、底部は起伏をもち、覆土中に複数の小礫を含む。出土遺物は、確認できなかった。



- P01  
 1. 原層土 01-01 (しまり目 アフトローム上粒子・ブロック多量)  
 2. 埋戻土 01-02 (しまり目中層 アフトローム上粒子・ブロック多量)
- P02  
 1. 原層土 02-01 (しまり目中層 アフトローム上粒子・ブロック多量)  
 2. 原層土 02-02 (しまり中下層 アフトローム上粒子・ブロック多量)
- P03  
 1. オロゾ層 03-01 (しまり中層 アフトローム上粒子無量)  
 2. 埋戻土 03-02 (しまり中下層 原層土上粒子 アフトローム上粒子)
- P04  
 1. 埋戻土 04-01 (しまり目)
- P05  
 1. 灰オゾ層 05-01 (しまり目)
- P06  
 1. 埋戻土 06-01 (しまり目)
- P07  
 1. 埋戻土 07-01 (しまり目)
- P08  
 1. 原層土 08-01 (しまり目 原層土上粒子)  
 2. 原層土 08-02 (しまり目 原層土上粒子・ブロック多量)  
 3. 埋戻土 08-03 (しまり目 アフトローム上粒子・ブロック多量)
- P09  
 1. 原層土 09-01 (しまり目 灰化多量 5層)
- P10  
 1. 原層土 10-01 (しまり目 アフトローム上粒子・ブロック多量)

- P11  
 1. アフトローム上  
 2. オロゾ層 01-02 (しまり中層 アフトローム上粒子無量)
- P12  
 1. 原層土 12-01 (しまり目 アフトローム上粒子無量)
- P13  
 1. 原層土 13-01 (しまり中層)
- P14  
 1. 原層土 14-01 (しまり中層)
- P15  
 1. 原層土 15-01 (しまり目 アフトローム上粒子多量)
- P16  
 1. 埋戻土 16-01 (しまり目 アフトローム上粒子多量)
- P17  
 1. 埋戻土 17-01 (しまり目 アフトローム上粒子多量)  
 2. 原層土 17-02 (しまり目 アフトローム上粒子無量)
- P18  
 1. 原層土 18-01 (しまり目 アフトローム上粒子・ブロック多量)  
 2. オロゾ層 01-02 (しまり中層 原層土上粒子・ブロック多量)  
 3. 埋戻土 18-03 (しまり中層 原層土上粒子・ブロック多量)
- P19  
 1. 原層土 19-01 (しまり目 アフトローム上粒子多量)
- P20  
 1. 原層土 20-01 (しまり目)
- P21  
 1. 埋戻土 21-01 (しまり目 原層土上粒子・ブロック多量)
- P22  
 1. 原層土 22-01 (しまり中層 砂質 原層土上粒子・ブロック多量)  
 2. 原層土 22-02 (しまり中層 砂質 原層土上粒子・ブロック多量)  
 3. オロゾ層 01-02 (しまり中層 アフトローム上粒子・ブロック多量)

第 11 図 第 1 号～第 24 号ピット



第12図 第25、第26号ピット

### 第10号ピット (第11図)

D-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.38 m、短軸で0.29 mを測り、深さは0.09 mである。  
平面プランについては、いびつな楕円形を呈するものである。  
掘り込みはわずかな落ち込みをもち、底部は起伏をもつ。  
出土遺物は、確認できなかった。

### 第11号ピット (第11図)

D-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で1.33 m、短軸で1.04 mを測り、深さは0.57 mである。  
平面プランについては、隅丸方形を呈するものである。  
掘り込みは両壁面ともほぼ垂直の落ち込みをもち、底部は平坦であり、覆土中に複数の小礫を含む。  
出土遺物は、確認できなかった。

### 第12号ピット (第11図)

C-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.25 m、短軸で0.25 mを測り、深さは0.12 mである。  
平面プランについては、いびつな円形を呈するものである。  
掘り込みはわずかな落ち込みをもち、底部は丸い。  
出土遺物は、確認できなかった。

### 第13号ピット (第11図)

C-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.82 m、短軸で0.69 mを測り、深さは0.19 mである。  
平面プランについては、いびつな方形を呈するものである。

掘り込みは緩やかなU字状の落ち込みをもち、底部は丸く、覆土中に複数の小礫を含む。  
出土遺物は、確認できなかった。

#### 第14号ピット（第11図）

C-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.51 m、短軸で0.40 mを測り、深さは0.07 mである。  
平面プランについては、いびつな円形を呈するものである。  
掘り込みは緩やかなレンズ状の落ち込みをもち、底部はやや平坦である。  
出土遺物は、確認できなかった。

#### 第15号ピット（第11図）

C-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.48 m、短軸で0.47 mを測り、深さは0.03 mである。  
平面プランについては、円形を呈するものである。  
掘り込みは緩やかで浅い落ち込みをもち、底部に複数の小礫を含む。  
出土遺物は、確認できなかった。

#### 第16号ピット（第11図）

C-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.53 m、短軸で0.41 mを測り、深さは0.1 mである。  
平面プランについては、東西に延びる楕円形を呈するものである。  
掘り込みはレンズ状の落ち込みをもち、底部は丸く、底部に複数の小礫を含む。  
出土遺物は、確認できなかった。

#### 第17号ピット（第11図）

C-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.55 m、短軸で0.54 mを測り、深さは0.13 mである。  
平面プランについては、楕円形を呈するものである。  
掘り込みはレンズ状の落ち込みをもち、底部は丸く、底部に複数の小礫を含む。  
出土遺物は、確認できなかった。

#### 第18号ピット（第11図）

C-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.49 m、短軸で0.40 mを測り、深さは0.21 mである。  
平面プランについては、楕円形を呈するものである。  
掘り込みは両壁とも斜めに落ち込みをもち、底部は平坦で、底部に複数の小礫を含む。  
出土遺物は、形象埴輪が1点のみ検出された。第5号墳墳丘からの流れ込みである。

#### 第19号ピット (第11図)

C-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.52 m、短軸で0.37 mを測り、深さは0.11 mである。  
平面プランについては、いびつな方形を呈するものである。  
掘り込みはレンズ状の落ち込みをもち、底部は丸く、底部に複数の小礫を含む。  
出土遺物は、確認できなかった。

#### 第20号ピット (第11図)

C-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.31 m、短軸で0.26 mを測り、深さは0.11 mである。  
平面プランについては、いびつな楕円形を呈するものである。  
掘り込みはレンズ状の落ち込みをもち、底部は丸い。  
出土遺物は、確認できなかった。

#### 第21号ピット (第11図)

B-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.45 m、短軸で0.39 mを測り、深さは0.21 mである。  
平面プランについては、いびつな隅丸方形を呈するものである。  
掘り込みは一方の壁面は垂直、一方が斜めの落ち込みをもち、底部は丸く、底部に複数の小礫を含む。  
出土遺物は、確認できなかった。

#### 第22号ピット (第11図)

B-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。検出されたのは一部のみで半分は調査区域外である。  
規模は、検出長軸で0.85 m、検出短軸で0.25 mを測り、深さは確認面から0.46 mである。  
平面プランについては、楕円形を呈するものと推定される。  
掘り込みはU字状の落ち込みをもち、底部は丸い。  
出土遺物は、確認できなかった。

#### 第23号ピット (第11図)

B-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.60 m、短軸で0.44 mを測り、深さは0.18 mである。  
平面プランについては、楕円形を呈する。  
掘り込みはU字状の落ち込みをもち、底部は丸い。  
出土遺物は、確認できなかった。

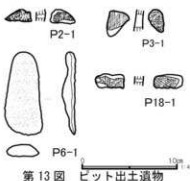


### 第24号ピット (第11図)

B-6グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にはない。  
規模は、長軸で0.6m、短軸で0.44mを測り、深さは0.18mである。  
平面プランについては、楕円形を呈する。  
掘り込みは両壁が垂直の落ち込みをもち、底部は平坦である。  
出土遺物は、確認できなかった。

### 第25、26号ピット (第12図)

B-7及びC-6・7グリッドから検出した。他の遺構と直接的な重複関係にはなく、第25、26号ピットとで対をなす柱穴と推定される。  
規模は、第25号ピットが長軸で0.97m、短軸で0.73mを測り、深さは0.59m、第26号ピットが長軸で1.53m、短軸で1.23mを測り、深さは0.67mである。  
平面プランについては、いずれも楕円形を呈する。  
掘り方はいずれのピットもレンズ状、もしくは、U字状の掘り込みを掘ったのち、中央に方形状のピットを掘り、その端部に柱穴痕をもつ。  
断面観察から柱痕が確認できたのは第26号ピットのみであり、その径は17cmと推定される。  
2基の柱間は5.38mを呈し、2基を結んだ線に直交方向の線を引くと、第5号墳へ向かう参道と推定可能な導線が確認できる。これら柱穴は鳥居、もしくは門のような建物があつた可能性が考えられる。  
出土遺物は、確認できなかった。



第13図 ピット出土遺物

第4表 ピット出土遺物観察表 (第13図)

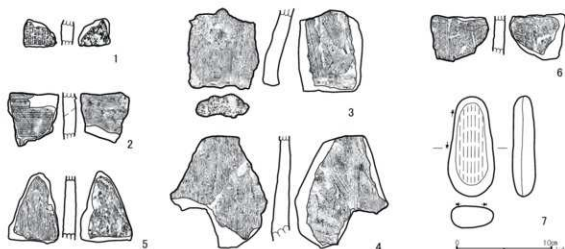
No	図種	図高	出土	色調	地蔵	手法、形態の特徴等	備考
P2-1	形象縮輪?	(1.3)	AFGM	外面：にぶい・橙 7.5YR7/4 内面：明赤褐 5YR5/6	B	外面：ハケ目 内面：ナデ	白色粉末状物質含む
P3-1	形象縮輪?	(2.3)	AM	橙 2.5YR6/6	A	外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目	
P6-1	石	最大長 8.7 最大幅 50.1g	最大幅 3.4 最大厚 1.2	重さ		砂岩	
P18-1	形象縮輪		AM	明赤褐 2.5YR5/6	A	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目	

### 3 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物である。いずれも地形測量の際に墳丘からの採集である。

第5表 遺構外出土遺物観察表 (第14図)

No	図種	図寸	図高	図径	出土	色調	地蔵	埋存率	手法、形態の特徴等	備考
1	円筒縮輪	(2.6)	-	-	ABMN	にぶい・橙 5YR6/4	A	個別片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目、輪縁み面有	
2	形象縮輪	(4.0)	-	-	ABEJM	橙 7.5YR6/6	A		外面：縦位ハケ目、上部交部部有	窯
3	形象縮輪	(8.1)	-	-	ABGHKM	にぶい・赤褐 5YR5/4	A	底部片	外面：縦位ハケ目 内面：縦位・斜位ハケ目 底部に工具当て痕有	瓦の断面 粘土に角閃石含む
4	形象縮輪	(11.1)	-	-	ABEJIKM	明赤褐 5YR5/6	A	基部	外面：ナデ調整後縦位ハケ目 内面：縦位ハケ目、ナデ	粘土に角閃石含む
5	形象縮輪	(6.7)	-	-	ABHKMN	橙 2.5YR6/6	A		外面：縦位ハケ目	
6	形象縮輪	(4.2)	-	-	ABMN	外面：橙 5YR7/6 内面：橙 5YR6/6	A		外面：縦位ハケ目 内面：ハケ目、ナデ	
7	磨石	最大長 10.5 最大幅 4.5 最大厚 2.3	重さ 181.5g						石材：砂岩 前面・断面部にミガキ面有	



第13図 遺構外出土遺物

## V 調査のまとめ

### 第5号墳について

三ヶ尻古墳群においては昭和50年代の上越新幹線建設に伴う調査によって、様相が明らかになってきた古墳群である。周囲には現在までに64基の古墳が検出されており、かつては100基以上の古墳が築造されていたと考えられる。近年の開発等により削平や、消滅の危機にある中、今回調査した第5号墳は消滅を免れ、一部削平を受けるが、主体部そのものは今後も保存されることとなり、墳丘が残存する数少ない古墳である。

第5号墳は南へ一部現存する三ヶ尻林遺跡第4号墳（別称やねや塚古墳）と類似性をもち、地形測量の結果、円墳と断定でき、検出された埴輪から6世紀後半～7世紀初頭と比定でき、第4号墳とほぼ同時期の築造である。

また、墳丘は2段築成であり、上下に葺石帯をもつ、中段テラス部は未調査であるが、葺石の痕跡は皆無で代わりに埴輪片が採集できたことから、中段には埴輪列があったことが疑われる。そしてやや主軸に違いがあるが、南側にブリッジ部をもつ周溝をそなえ、溝の様相は浅く、平面プランもいびつで円形ではない。いずれも第4号墳と同様の特徴をもつ。

ただし、検出した埴輪を比較すると、焼成、色調に類似性があるが、胎土においては、第5号墳は角閃石や針状物質を含むものが多いのに対し、第4号墳は黒雲母が特徴となっていることから産地の違いが推定できる。

いずれにしても、墳丘については同時期の築造はもちろん、築造者においても同一集団によるものと考えられる。古墳の技術は、簡潔に述べると、土の運搬・盛土・版築の設計、方位・測量・角度の産出、土量配分・労働量等の計算、道具の導入などが必須である。

こうした技術は大陸から伝えられ、朝鮮から渡来した技術者とともに、古墳築造にも応用されたものと考えられる。

古墳はただの盛山というわけではなく、当時の最新技術、多くの労力をもって築造されたものである。

## 第25、26号ピットについて

今回の調査では第25、26号ピットは5.38mの柱間をもつ柱穴であり、位置関係から考えると、第5号墳の周溝南のブリッジ部へ続く参道と捉えることが可能なことから、門、鳥居のような建物跡と推定できる。一般的に現在の鳥居の様式は8世紀には形が確立していることから、この時期にこのような建物跡が存在していても不思議ではないが、これらピットからは検出遺物がないため、時期は不明である。

しかし、少なくとも開口部が南ということは周溝におけるブリッジから、もしくは開口部の石組みから判断することが可能である。周溝は先述したとおり浅く、墳丘も手入れをしないと数十年単位で緑地化が進行する。そのことから考えて、周溝が埋没する前、墳丘の葺石の配列や、開口部の石組みが周囲から判断できる時期までに、建物を設置した可能性が考えられる。

それは築造から早い時期と推定され、祖先に対する墓前祭祀などの儀礼をおこなっていたのかもしれない。

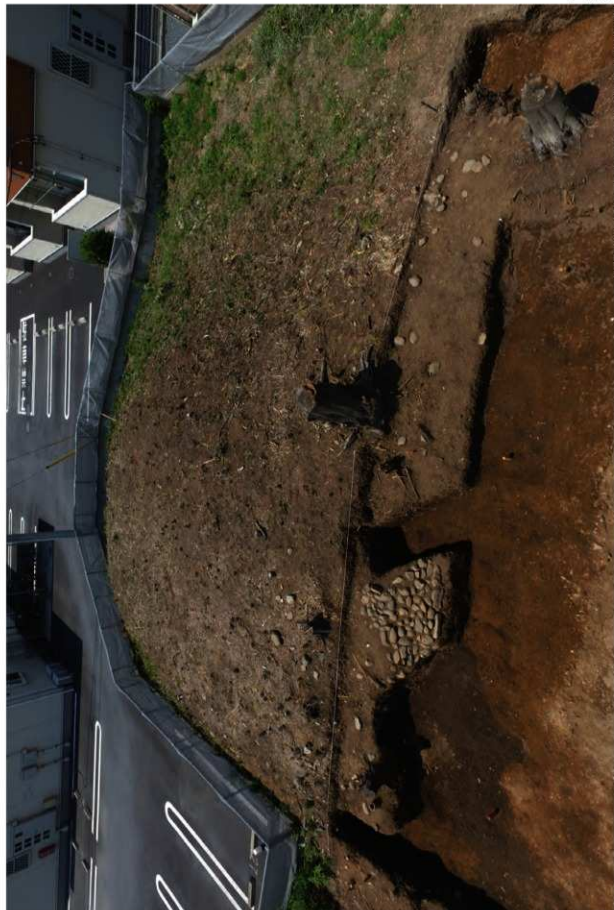
しかしながら、後世にはこの建物は消失し、開口部の位置は分からなくなっていたようで、今回の調査開始前までに設置されていた祠は墳丘テラス部東側に東向きに設置されていた。

この第5号墳の築造は古墳時代後期であり、今回の建物跡から俗界と墳丘とを区画する一種の門のような存在は、この時期まで遡る可能性があることが確認できた。

## 引用・参考文献

- 熊谷市 1963『熊谷市史』前編  
熊谷市教育委員会 2015『熊谷市史 資料編1 考古』  
2002『三ヶ尻遺跡Ⅱ』  
2003『三ヶ尻遺跡Ⅲ』  
2015『龍原裏古墳群Ⅳ（龍原裏古墳群12・13・14・15号墳）龍原裏遺跡Ⅲ』  
熊谷市三ヶ尻遺跡調査会 1999『三ヶ尻遺跡』  
熊谷市石原古墳群調査会 2008『石原古墳群第2号墳』  
熊谷市遺跡調査会 2012『樋の上遺跡』  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ 三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第23集  
『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 三ヶ尻林(2)・台』  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第34集  
臨川書店 1969『神道大辞典』  
第一書房 1986『鳥居の研究』

# 写 真 图 版



図版 1

三ヶ尻古墳群第5号墳 全景（上から（奥が西））

図版 2



三ヶ尻古墳群第5号墳 全景 (東から)



墳丘東側 葦石検出状況（上から（奥が西））



墳丘東側 葦石検出状況



墳丘東側 断ち割り後（南東から）

図版 4



墳丘東側断ち割り 壁面 (南東から)



墳丘東側サブトレンチ 壁面及び葺石配列状況 (北東から)



第 25 号ピット完掘状況 (南から)



第 26 号ピット完掘状況 (南から)



第 9 図 1 ~ 9



第 9 図 10 ~ 19



第 9 図 20、21



第 9 図 22 ~ 29





第9図 30～38



第9図 39、40



第10図 1～7



第10図 8～13



第10図 14～19



作業員 作業風景



地形測量作業風景

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みかじりいせきⅣ みかじりこふんぐんⅡ (みかじりこふんぐんだい5ごうふん)							
書名	三ヶ尻遺跡Ⅳ 三ヶ尻古墳群Ⅱ (三ヶ尻古墳群第5号墳)							
副書名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	第39集							
編集者名	腰塚 博隆							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2021(令和3)年3月19日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)		(㎡)	
三ヶ尻遺跡 三ヶ尻古墳群 三ヶ尻古墳群第5号墳	熊谷市三ヶ尻字林3408 番 ほか	11202	59-019 59-021 59-021-005	36° 15′ 51.5″	139° 31′ 71.1″	20190515 ～ 20190630	364㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三ヶ尻遺跡 三ヶ尻古墳群 三ヶ尻古墳群第5号墳	古墳	古墳時代 後期	墳丘1基 周溝1条 ピット26基	円筒埴輪・形象 埴輪・焙烙・土 人形・石器		残存する円墳の墳丘東側を削平した。一部葺石が配列状況がよくわかる形で残存していた。		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第39集

三ヶ尻遺跡Ⅳ

三ヶ尻古墳群Ⅱ

(三ヶ尻古墳群第5号墳)

令和3年3月19日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／株式会社三興社印刷所